

## (4) シクラメン

### 主要病害虫別防除方法

| 病害虫名<br>(病原体)                    | 農薬によらない防除   | 農薬による防除  |
|----------------------------------|---|--|
| 軟腐病<br>(細菌)                      | <p>①用土は蒸気消毒などにより無病のものを使用する。<br/>         ②移植・灌水などの管理作業で植物体に傷を付けないように注意する。<br/>         ③灌水は過湿にならないように注意する。<br/>         ④古鉢や棚は使用前に必ず消毒する。<br/>         ⑤被害株は発見しだい鉢とともに温室外へ持ち出し、適切に処分する。</p> <p>【参考事項】<br/>         梅雨明け前後から8月にかけて発生する。<br/>         灌水に使用する水にも注意が必要である。<br/>         宿主範囲（ナス科、アブラナ科、キク科、ユリ科、セリ科など）は極めて広い。</p> | <p>①茎葉部のみでなく、球根にも十分かかるように農薬を散布する。<br/>         (例)<br/>         ストレプトマイシン・有機銅水和剤（ドーマイシン水和剤）<br/>         非病原性エルビニア カロトボーラ水和剤（バイオキーパー水和剤）<br/>         （発病前～発病初期）</p>   |
| 葉腐細菌病<br>(細菌)                    | <p>①用土は蒸気消毒などにより無病のものを使用する。<br/>         ②移植・灌水などの管理作業で植物体に傷を付けないように注意する。<br/>         ③高温・過乾・過湿・多肥にならないように注意する。<br/>         ④古鉢や棚は使用前に必ず消毒する。<br/>         ⑤被害株は発見しだい鉢とともに温室外へ持ち出し、適切に処分する。</p> <p>【参考事項】<br/>         夏季に発生が多く、この時の植替え作業は本病を誘発する。<br/>         病原菌は土壤伝染及び種子伝染、二次的には灌水による飛沫や接触により伝染する。</p>                  | <p>①鉢上げ時、葉組み時、鉢替え時などに、予防的に農薬を灌注、散布又は土壤混和する。<br/>         (例)<br/>         有機銅水和剤（キノンドー水和剤40・キノンドー水和剤80・キノンドーフロアブル）（発病初期）<br/>         有機銅粒剤（キノンドー粒剤）（鉢上げ時または鉢替え時）</p>  |
| 萎凋病<br>( <i>Fusarium</i> )       | <p>①用土は蒸気消毒などにより無病のものを使用する。<br/>         ②被害株は発見しだい鉢とともに温室外へ持ち出し、適切に処分する。<br/>         ③高温多湿を避ける。<br/>         ④古鉢や棚は使用前に必ず消毒する。</p> <p>【参考事項】<br/>         本病により腐敗・乾固した株には、白色綿毛状のカビが見られる。この株を放置すると、ここから灌水の水しぶきや風などにより分生子が飛散し、二次伝染をおこす。<br/>         鉢上げ時にできる根の傷口から感染が起こりやすい。</p>   | <p>①発病初期から農薬を灌注する。<br/>         (例)<br/>         ベノミル水和剤（ベンレート水和剤）</p>   |
| 灰色かび病<br>( <i>Botrytis</i> )     | <p>①通風・換気などにより施設内の湿度を下げる。<br/>         ②枯葉や咲き終わった花をこまめに除去する。</p> <p>【参考事項】<br/>         梅雨時期や秋の施設を密閉し始めた時期（多湿、結露が発生しやすい）に発生する。<br/>         軟弱徒長している場合に多発しやすい。<br/>         宿主範囲が広く、空気伝染するため、他の罹病作物が伝染源となることもある。</p>  | <p>①常発場では農薬で予防散布を行う。<br/>         (例)<br/>         パチルス ズブチリス水和剤（ボトキラー水和剤）（ダクト内投入）<br/>         （発病前～発病初期）（花き類・観葉植物）<br/>         DBEDC乳剤（サンヨール）（発病初期）（花き類・観葉植物）<br/>         ②発生初期に農薬を散布する。<br/>         (例)<br/>         フルジオキソニル水和剤（セイビアーフロアブル20）（発病前～発病初期）<br/>         （花き類・観葉植物）<br/>         ペンチオピラド水和剤（アフェットフロアブル）（発病初期）（花き類・観葉植物）</p> |
| 炭疽病<br>( <i>Colletotrichum</i> ) | <p>①発病株は早期に除去し、適切に処分する。葉かきなどにより除去された枯葉は、直ちに施設外に持ち出し、適切に処分する。<br/>         ②高温、多湿にならないよう盛夏期の遮光や換気を行う。<br/>         ③地上部への灌水の水はねにより感染するので、発生施設では底面灌水に切りかえる。</p> <p>【参考事項】<br/>         発病適温は23～28℃で多湿時に多発する。<br/>         農薬の薬効が現れると病斑が乾固して病勢が停止するが、高温多湿条件になると再び発病するので、病斑部や病株は除去する。</p>   | <p>①発病初期から農薬を散布する。<br/>         (例)<br/>         ペフラゾエート乳剤（ヘルシード乳剤（施設栽培））<br/>         マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤）<br/>         有機銅水和剤（キノンドーフロアブル、オキシンドー水和剤80）</p>   |

| 病害虫名<br>(病原体)  | 農薬によらない防除  | 農薬による防除   |
|--|--|---|
| ミカンキイロアザミウマ  | ①施設の開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットや0.8mm目合いの赤色系ネットを張り、侵入を防止する。<br>②不必要な花及びほ場内の雑草は本種の発生源となるので、速やかに処分する。<br>③周辺の雑草にも寄生するので、除草する。                     | ①発生初期から農薬を散布する。<br>(例)<br>トルフェンピラド・メタフルミゾン水和剤 (アクセルキングフロアブル)<br>(花き類・観葉植物)<br>エマメクチン安息香酸塩乳剤 (アファーム乳剤) (花き類・観葉植物) (以上、アザミウマ類)<br>カルタップ水溶剤 (パダン SG 水溶剤)<br>クロルフェナビル水和剤 (コテツフロアブル) (花き類・観葉植物)<br>チアメトキサム水溶剤 (アクタラ顆粒水溶剤) (花き類・観葉植物) |
| <b>【参考事項】</b><br>生育の早い花や施設開口部付近の花での被害に注意する。<br>可能ならば、夏期に一度施設内の植物 (雑草を含む) を除去し、施設を2週間程度密閉し、害虫を蒸し殺すことも効果的である。  |  |   |
| ハスモンヨトウ  | ①施設の開口部に目合い4mm程度の防虫ネットを張り、侵入を防ぐ。<br>②孵化直後の幼虫は集団で加害しているので、捕殺の効果が高い。   | ①発生初期から農薬を散布する。<br>(例)<br>エマメクチン安息香酸塩乳剤 (アファーム乳剤)<br>クロルフェナビル水和剤 (コテツフロアブル) (以上、ヨトウムシ類)<br>フルベンジアミド水和剤 (フェニックス顆粒水和剤)<br>ルフェヌロン乳剤 (マッチ乳剤)<br>ピリダリル水和剤 (プレオフロアブル) (以上、花き類・観葉植物)   |
| <b>【参考事項】</b><br>多発するのは7~11月頃である。<br>若齢幼虫は、葉裏から集団で表皮を残して食害するため、白い食害部が目立つ。<br>中老齢幼虫は株間にもぐり、若いつぼみや葉を食害する。  |  |   |
| シクラメンホコリダニ   | ①施設間の株移動には注意する。また、セントポーリア、デルフィニウムなどを同じ施設に持ち込まない。<br>②施設近隣の作物 (イチゴ、ピーマン、トウガラシなど) から移らないように注意する。<br>③施設周辺の除草を行う。<br>④被害株をほ場外に持ち出し、適切に処分する。 | 登録農薬はない。  |
| <b>【参考事項】</b><br>他の寄生するホコリダニ類として、チャノホコリダニが確認されている。<br>シクラメンホコリダニによる被害程度は、チャノホコリダニによる寄生に比べて大きい。<br>初発時の肉眼による発見は困難で、春の幼苗期や9~10月の開花始めに、花や新葉の奇形、変色で気づくことが多い。 |  |   |